日本語、朝鮮語、中国語の二人称代名詞における対照研究

宋　善花・上原　聡

東北大学大学院国際文化研究科

1. はじめに

言語活動は、一般的に二人以上の人間の間で行われており、この活動を円滑に展開していく際、話し手は、自分自身、聞き手、更にその話題の中で出てくる第三者を指示する記号が必要になる。人称代名詞は話し手自身、聞き手および第三者の指示記号の役割を果たしており、言語活動においては欠かせない要素であると言える。人称代名詞の使用範囲や使用状況および使用方法は、当然、各言語の文法や言語習慣、さらに文化によって異なる。

人を指す言葉には、「社長」、「お父さん」のような職名や親族名称、「そちら」、「その人」のような指示詞や指示詞と人を表す名詞の組み合せ、また「わたし」、「あなた」などの代名詞型の語がある。しかし、日本語、朝鮮語、中国語における人称代名詞に対する定義が異なっているため、本研究では、代名詞型の語を取り上げ、データの収集および分析の対象とする。

人称詞または人称代名詞に関する研究は言語ごとに数多くなされている。その多くの研究は、人称代名詞の一側面あるいは一部分を取り上げているにすぎない。また、対照研究は、日本語と朝鮮語、もしくは日本語と中国語の二つの言語を対照するもので、日本語、朝鮮語および中国語の対照研究はそれほど進んでいないと思われる。

本研究の目的は、韓国のテレビドラマおよびその日本語版、中国語版を資料とし、日本語、朝鮮語、中国語の二人称代名詞を中心に、人称代名詞の使用実態を調べ、その差異を明らかにすることである。また、収集したデータに基づき、それぞれの言語における人称代名詞の使い方の比較を通して、その使用頻度の差の原因を考察する。

2. 研究方法および分析データ

分析資料としては、韓国のテレビドラマ 4 本の中から、10 話を選択し、これらの朝鮮語版、日本語版、中国語版を用い、データを収集する[1]。

また、上記の 4 本の作品中、次のような人称代名詞はデータから排除する。

- 原作と翻訳版の意味が異なっている場合
- 人称代名詞が諺・慣用句の中で使われた場合
- 人称代名詞が挨拶言葉として使われた場合

本研究での分析に用いられる韓国テレビドラマの原作版である朝鮮語版と翻訳版である日本語版、中国語版に現れた二人称代名詞の分布を表 1 に示す。

表 1　各国語版における二人称代名詞の総出現数

	朝鮮語版	日本語版	中国語版	計
二人称代名詞	439	209	1420	2068

表を見ると、二人称代名詞は、中国語の出現数が最も多く、次に朝鮮語、日本語の順になっている。

本稿では、表 1 に示した各国語版の二人称代名詞の使用状況に基づいて使用頻度の差の原因を分析、考察する。

3. 中国語と日本語・朝鮮語の使用頻度の差の原因

3-1. 人称代名詞の使用範囲

二人称代名詞は話し手が目の前にいる聞き手に対して使う言葉で、相手の扱い方に直接かかわってくる。ポライトネス論あるいは敬語の角度から見ると、人称代名詞そのもので人を示すこと、特に尊敬すべき人、目上の人あるいは敬意を表したい人を人称代名詞そのもので示すことは失礼な行為であり、できるだけ避けられるという点においては三言語とも共通しているところである。

データに現れた二人称代名詞の種類をまとめると、日本語には、「あなた」、「お前」、「君」、「お前ら」など、朝鮮語には、「ne」、「tangsin」、「caney」、「neney」など、中国語には「ni」、「nin」、「nimen」がある。

まず、日本語と朝鮮語の二人称代名詞を見ると、使用対象に制限がある。例えば、日本語での「お前」、「君」は、同等か目下に対してしか使えない語彙である。また、朝鮮語の「ne」も同等か目下に対して用い、「caney」は、中年の人が自分の品位を保ちながら目下に対して用いる語彙である。そして、「tangsin」は、一般には話し言葉として夫婦の間で使われる[2]。このように、日本語と朝鮮語の二人称代名詞のいずれも使用範囲・使用対象に制限があるのに対し、中国語の二人称代名詞は使用範囲が極めて広い。例えば、現代中国語で最も一般的に使われている「ni」は、目下や同級生は勿論、恋人同士や社会人同士にも使える。また、中国語には、敬称である二人称代名詞「nin」が存在する。基本的には先生や両親などの目上の人には敬称である「nin」を使うべきであるが、たとえいくら目上の人であっても喧嘩の時など対立的な関係にある場合は、「ni」で相手を扱うこともできる。つまり、中国語では、話し手の聞き手に対するその時々の心理的距離の変化によって二人称代名詞の選択が調節される。

上述した二人称代名詞の使用範囲の相違は、三言語の使

---

[1] データを収集した作品とそれぞれの回は、『冬のソナタ』（第 1 話、第 2 話、第 3 話、第 4 話　計 220 分）、『夏の香り』（第 13 話、第 14 話　計 110 分）、『秋の童話』（第 10 話、第 11 話　計 110 分）、『パリの恋人』（第 13 話、第 14 話　計 90 分）である。これらの回は、主人公同士の会話場面のみではなく、できるかぎり主人公同士以外の人物の登場場面からのデータも取ることを考慮に入れて選択したものである。

[2] 夫婦以外の人間関係で使われる場合もあるが、相手に不愉快、無礼などの印象を与える。

用頻度に影響を与えている基本的な要因であると思われる。一方、使用範囲が比較的狭い日本語、朝鮮語では、人称代名詞以外にどのような形式で聞き手がとらえられているのか。

日本語、朝鮮語、中国語の二人称代名詞の使用状況を調べるため、まず、2068 個の二人称代名詞の使用実態を八つのパターンに分け、その比率を図 1 に示した。図中、A は人称代名詞が使用されている場合であり、B は人称代名詞が使用されていない場合である。順番は、人称代名詞の多い順により、中国語、朝鮮語、日本語の順にする。図を見ると、ABB のパターン、すなわち中国語では人称代名詞が使用されているが、日本語と朝鮮語では使用されていないパターンの比率が最も高いことが分かる。次に比率が高いのは AAB パターンであり、以下、その他[3]のパターン、AAA パターンの順になっている。

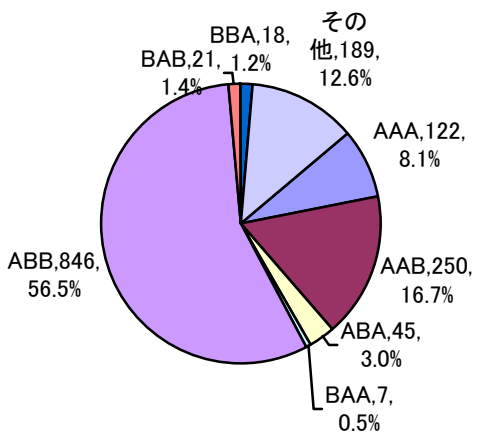

図1 三言語における二人称代名詞の使用パターンの比率

比率が圧倒的に高い ABB パターンをさらに詳しく分析するため、ゼロ形式と人称名詞に分けて、日本語と朝鮮語でそれぞれどのような形式が用いられているかについて検討した。その結果を表 2 に示す。表中の Ⅰ はゼロ形式である。また、人称名詞を Ⅱ 名前やあだ名、Ⅲ 指示詞や人を表す普通名詞、Ⅳ 職名や親族名称に分けて示す。

表 2 ABB パターンにおける日本語・朝鮮語の表現形式

	日本語	朝鮮語
Ⅰ	709(83.8)	671(79.3)
Ⅱ	79(9.3)	87(10.3)
Ⅲ	24(2.8)	32(3.8)
Ⅳ	34(4.1)	56(6.6)
合計	846 (100.0)	846(100.0)

( ) 内はパーセンテージ

表を見ると、中国語の人称代名詞の使用に対し、日本語、朝鮮語ともゼロ形式を取る例が最も多く、全体の約 8 割を占めている。このような現象からも、日本語と朝鮮語の類似性の一面が見られる。

次に、比率がやや高いパターンは名前やあだ名を使用している例である。その中でも日本語、朝鮮語の「○○さん」、「○○ssi」の用法がいずれの言語においても 9 割以上を占めている。日本語、朝鮮語では、たとえ恋人関係であってもお互いに人称代名詞で呼びにくい一面がある。つまり、日本語、朝鮮語の「○○さん」、「○○ssi」のような名前の用い方は、丁寧さを保ちつつ、人称代名詞の使いにくさの空白を埋めていると考えられる。「○○さん」、「○○ssi」は、両言語の人の呼称において極めて便利な語彙の一つであると思われる。目上の人に対し、人称代名詞や名前を基本的に使えない日本語と朝鮮語では、職名や親族名称を用いたり、「先輩」、「そちら」などの普通名詞や指示詞を使用したりする。

また、中国語には敬称の二人称代名詞「您 nin」があるのに対し、日本語と朝鮮語にはこれに相当する語彙が存在しないのは、人称代名詞の構造上大きな相違点である。

3-2. 日本語・朝鮮語の敬語の体系、授受表現、受動表現

表 2 を見ると、中国語で人称代名詞が用いられているのに対し、日本語も朝鮮語もゼロ形式を取るパターンが約 8 割で、最も高い比率を占めていることが分かる。その中で、中国語文に対し、日本語・朝鮮語のいずれもゼロ形式を取る例は、650 例ある。

李（1991）は、日本語文で、敬語を用いた場合は人称代名詞があまり使われていないという調査結果から、敬語の人称代名詞代行機能を指摘している。授受表現や受身・使役表現も、日本語の方が中国語より発達していると言える。文の構造が日本語と類似している朝鮮語も、敬語の体系や授受表現が中国語より発達していると言えるだろう。それでは、これらの文法現象は日本語・朝鮮語の人称詞の省略にどれぐらい影響を与えているだろうか。

まず、日本語・朝鮮語であらわれている敬語の使用、授受表現、受身・使役表現を調べた。その結果、これらの表現の全体における比率は、日本語で 16.5%、朝鮮語で 20.1%であることが分かる。このことからこれらの表現は、日本語、朝鮮語における人称詞の省略現象にある程度影響を及ぼしているが、最も重要な原因ではないことも分かる。これは、おそらく話し言葉である分析資料の特徴によるものであると言えるだろう。(1) は、授受表現の例である。例文の中で、「K」は朝鮮語を、「J」は日本語を、「C」は中国語を表している（以下同様）。

(1) チョンア→ヘウォン（友人）

K：minwusenpay-kkaci ta o-myen yaykihay<u>cwulkka</u> hays-nuntey amwulay-to ni-ka kwungkumhatanikka mence malhay<u>cwulkey</u>.

J：ミヌ先輩がきたら話そうって思ってたんだけど。ヘウォンが知りたがっているみたいだから、先に話し<u>てあげる</u>。

C：benlai dasuan minyou qianbei lai zhihou zai jiang chu lai de. jiran ni zheme xiang zhidao, na jiu xian jiang gei <u>ni</u> ting ba. 『夏の香り』

例文での下線部分を見ると、授受表現の「～てあげる」、「～ecwuta」が使われている。中国語でも授受関係を表す語「gei」が使われる場合があるが、日本語、朝鮮語の授

[3] その他には、同じ内容を表しているが、各言語の言語 習慣により違う表現を使うパターンや違う語彙を使用するパターンなどが含まれている。

受表現のように、語彙そのものにある程度方向性があるという性質は持っていない。そのため、目的語を明示する必要性が高くなってくる。

3-3. 中国語における主語、目的語の必要性

人称代名詞は、一つの文の中で主語や目的語や修飾語などの役割を果たしている。

まず、中国語の二人称代名詞における主語（表 3）の表現形式を見ると、「呼びかけ+人称代名詞」の用法が特徴的である。(2) はその例である。

表 3　中国語の主語における表現形式およびその数

	人称代名詞のみ	呼びかけ＋人称代名詞	その他	小計/総
二人称代名詞	402	56	8	466/650

(2) ウンソ→ユン教授（父親）

K：appa, sinay po-le osyesseyo?

J：お父さん、シネに会いにきたの？

C：ba,ni lai zheli zhao xin'ai ma?　『秋の童話』

例文のように、呼びかけ語[4]で既に聞き手の注目を引いている。しかし、中国語ではその直後に人称代名詞が用いられるのに対し、日本語、朝鮮語では聞き手を指示する語彙のない省略形を取っている。そこで、たとえ、中国語文での主語である人称代名詞（「ni」など）を省略したりあるいは同一人物を表す人称名詞に入れ替えたりしても、また、日本語、朝鮮語での省略されている主語（「お父さん」「appa」、など）を補っても、非文にはならない。つまり、三言語とも、呼びかけ語の直後にくる主語はあってもなくても文が成り立つ。にもかかわらず、中国語文で人称代名詞が用いられているのは、主語を必要とする構文の影響を受けていると思われる。このように、中国語で話し手が聞き手を二重の形で呼んでいるのは、聞き手への注目を引く上に、主語を必要とする中国語の構文の影響を受け、パターン化した用法に定着していると思われる。

次に、殆どの割合を占めている人称代名詞のみで構成された主語について分析を行う。

話し言葉での話し手の聞き手のことに対する発話、つまり聞き手が動作主になる典型的な文として、疑問文、命令文（禁止、命令、依頼など）、勧誘文などがある。疑問文の場合は、疑問を表す終助詞「か」、「kka」、「ma」やイントネーションで聞き手のことについて聞いていることが特定できる。また、命令文の場合は、他人でない目の前にいる聞き手に命令、依頼しており、勧誘文の場合は、動作主に話し手と聞き手が同時に含まれている。ここから、疑問文、命令文、勧誘文では、話し手が聞き手に発話していることが明らかであるため、二人称代名詞が先行詞として必ずしも要求されるとは限らないという点では三言語とも共通している。しかし、日本語と朝鮮語の場合は、省略形つまりゼロ形式を取る傾向が強いが、中国語では却って主語を取るのが一般的であることがデータから分かる。さらに、中国語において親族名称や職名や名前などでなく、二人称代名詞が主語としてよく使われるのは、動作主が話し手でも第三者でもない聞き手であることを強調して指示する役割を果たしていると思われる。例文（3）がその一例である。つまり、「婚約する」と言い出した人が「wo（わたし)」ではなく「ni（あなた)」であることを強調している。

(3) ギジュ→テヨン（恋人）

K：eccaysstun pwunmyenghi yakhon hanta kulaysse?

J：婚約するって、さっきはっきり言ったよな。

C：fanzheng ni yijing shuo guo yao dinghun de.

『パリの恋人』

さらに、中国語の人称代名詞の使用に対し、日本語、朝鮮語では、主語以外に目的語もよく省略される。

例えば、(4) は目的語が人称代名詞である例である。

(4) ユミ→ジュンソ（恋人）

K：pamkil cosimhayyo. cal tanyeokwuyo. na kitalilkeyyo.

J：ジュンソ！運転気をつけてね、外真っ暗だから。私、起きて待ってる。

C：junxi,lu shang yao xiaoxin yidian'er a! kaiche buyao kai de tai kuai. wo,wo hui deng ni.

『秋の童話』

例文（4）で、下線の目的語「ni」を省略すると、文に不自然さが感じられるが、日本語・朝鮮語では、「待ってる」のみの目的語がない方が自然である。同じく会話文なのに、両者の目的語に対する要求は大きく異なる。また、中国語には、前半の文の目的語であると同時に、後半の文の主語の役割も果たす「兼語」がある[5]。人称代名詞が「兼語」である用例は 20 例にすぎないが、この「兼語」である人称代名詞がないと、非文になり、不可欠な要素である。

このように、中国語文では、人称代名詞が主語あるいは目的語として要求される傾向が強く、よく用いられている。その中には、話し言葉であるため、人称代名詞が使われなくても文が通じる例もあるが、人称代名詞が使われた方が自然な文になる例、また、人称代名詞がないと非文になる例が多い。これは、主語あるいは目的語を必要とする中国語の構文の影響であると思われる。これにより、人称代名詞が目的語として用いられることは、中国語における人称代名詞の使用頻度が高い原因の一つであると考えられる。逆に、日本語と朝鮮語では、比較的主語あるいは目的語が省略される場合が多い。

4. 日本語と朝鮮語における使用頻度の差の原因

ここでは、日本語と朝鮮語における人称代名詞の差の原因について分析を行う。

4-1. 人称代名詞の使用範囲

前にも述べたように、朝鮮語の「ne」も日本語の「お前」、「君」も同等か目下に対してしか用いられない代名詞である。しかし、データの中で朝鮮語の二人称代名詞「ne」271 例に対し、日本語で名前で呼びかけている用例は 56 例で 20.7%を占めている。この 56 例のうち、女性同士あるいは女性から男性への呼びかけには人称代名詞ではなく、ファーストネームが一般的に用いられることが分かった。特に、日本語においては、たとえ同級生である女性同士の間でも

[4] 呼びかけ語には、例文の中の親族名称以外に、名前や職名なども含まれている。

[5] 「兼語」がある単文を「兼語句」といい、中国語文での特徴的な構文である。

自由に使える適切な代名詞は存在しないといっても過言でなかろう。また、もう一つの特徴として、朝鮮語には聞き手への呼びかけに引き続き、人称代名詞が用いられる用法がある。朝鮮語の用例 36 例のうち、日本語で 34 例が呼びかけで終わり、ゼロ形式を取っている。その一例として（5）があげられる。

上でも述べたように、このような用法は中国語でも頻繁に使われており、次に朝鮮語でよく使われることは、日本語、朝鮮語、中国語における人称代名詞の使用頻度の差が生じる要因の一つであると考えられる。

（5）スヒョク→テヨン（友人）

K：thayyeng-a, ne cikum etisse? pelsse kankeya?

J：テヨン、今どこなんだ？もう帰ったのか？

C：taiying,ni zai na'er? yijing zou le ma?

『パリの恋人』

4-2. 日本語の敬語の体系、授受表現、受動表現

日本語と朝鮮語は、両方とも SOV 言語であり、文の構造が類似している。また、人を呼ぶ言葉に対する定義や分け方、また目上の人には基本的に使えない人称代名詞の使用範囲などは、両言語において極めてよく似ている。しかし、日本語の二人称代名詞を見ると、その個数は朝鮮語の半分にすぎない。

鄭（2002）は、小説の対訳資料からデータを集め、日本語文で授受表現と受動文が頻繁に使われることで、人称詞の省略を促していると指摘している。確かに、授受表現において、日本語には「くれる」「あげる」「もらう」の三つのパターンがあるのに対し、朝鮮語には「cwuta」と「patta」の二つのパターンしかない。

それでは、小説ではない映像資料では、授受表現や受身・使役表現は人称詞の省略にどれぐらい影響を与えているだろうか。まず、日本語文にあらわれている敬語の使用、授受表現、受身・使役表現およびそれぞれの出現総数を表 4 に示す。総数の 233 は、朝鮮語では人称詞が用いられているが、日本語ではゼロ形式を取っている用例を指している。

表 4　日本語文における敬語、授受表現、受身・使役表現の使用状況

敬語の使用	授受表現	受身・使役表現	小計／総
1	12	3	16／233

表から分かるように、日本語文における授受表現および受身・使役表現は、全体の 1 割にも達しておらず、人称詞の省略現象に大きな影響は与えていない。すなわち、今回のデータの中では、誰のことに言及しているか特定できるため、授受表現や受身・使役表現の影響はあまり受けないと言えるだろう。

4-3. 朝鮮語における主語、目的語の必要性

次に、例文（6）を見よう。

（6）母親→ミンヌ（息子）

K：hyeywenssi-lul thonghay-se unhyey huncek-ul mosnukkyessta-ko malhal swu isse? nen incenghaki silhkeyss-ciman emman nel ala.

J：ヘウォンさんをみてウネを思い出したことは一度もないと言える？認めたくないかもしれないけど、母さんには分かってる。

C：ni neng shuo kandao huiyuan,hui xiangbuqi yinhui ma? ni dangran buyuan chengren,danshi wo liaojie ni.

『夏の香り』

例文のように、朝鮮語で主語として下線部分の「ne」が使われているのに対し、日本語では省略されている例が多く見られる。朝鮮語でのこのような人称詞の用例は 213 例にのぼり、主語あるいは目的語として、必ずしもなくてはならない要素ではない。つまり、朝鮮語で人称詞が使われなくても文脈に支障がない。文の構造が類似している日本語と朝鮮語でも、主語あるいは目的語が要求される傾向は、朝鮮語の方が強いことが分かる。勿論、日本語と朝鮮語における人称詞の使用頻度の差について、これらの要因のみでは説明しきれないが、この点についての考察は今後の課題にしたい。

5. おわりに

以上、テレビドラマにおける日本語版、朝鮮語版、中国語版の人称代名詞の使用実態を調べ、二人称代名詞を中心に、その使用頻度を明らかにし、その差の要因について分析を行った。

日本語および朝鮮語の人称代名詞の省略現象において、敬語の体系や授受表現や受身・使役表現は主な要因として見られなかった。

日本語、朝鮮語、中国語における人称代名詞の使用頻度の差の要因をまとめると、1）人称代名詞の使用範囲において、中国語が日本語・朝鮮語より、また、朝鮮語の方が日本語より広いこと、2）主語あるいは目的語を必要とする傾向は、中国語が日本語・朝鮮語より、また、朝鮮語の方が日本語より強いこと、3）「呼びかけ+人称代名詞」のパターン化した用法は、中国語で最も頻繁に使われており、次に朝鮮語でよく使われること、4）中国語には、敬称としての二人称代名詞「nin」が存在すること、の 4 点を指摘することができる。三言語における人称代名詞の使用頻度の差異は、上記の要因が複合的にはたらいた結果から生じたものであり、ある一つの要因に限って説明しきれるものではない。

今後の課題としては、呼称の問題と指示体系との関わりの視点から、また、人称代名詞だけでなく日本語と朝鮮語の呼称においての特徴とも言える人称名詞も含む人称詞に考察の範囲を広げていくことなどがあげられる。

謝辞

本研究は、平成 17 年度日本学術振興会科学研究費補助金（No.17401012）の補助を受けて行われています。

主な参考文献：

鄭恵先「日本語と韓国語の人称詞の使用頻度―対訳資料から見た頻度差とその要因―」『日本語教育』114 号　日本語教育学会　2002

李方「日本語の人称代名詞の省略について」『愛媛国文研究』41 号　愛媛国語国文学会　1991

鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店　1973

鈴木孝夫『ことばと社会』中央公論社　1975

続三義「中国語の人称代名詞と指示呼称語との組み合せについて」『中国語学』236 号　日本中国語学会　1989